

ある職人が歩いてきた道

—佐渡島羽茂町大石・中川眞晴さん（竹細工・籐細工）への聞き書きから—

中村実央

1. はじめに

職人の手によって作られてきたモノが、社会や生活様式の変化とともに、身のまわりから消えていく。筆者は、社会の変化にリンクしながら伝えられてきた手工芸品とそれを作り出す職人の姿を追い、モノとその背景などについて考えてみることに関心を持っている。時代の流れにそって多くの伝統工芸は消えていくのかもしれないと思う一方で、それらが様々な形で展開していく可能性についても注目したい。

筆者は2001年7月に、新潟県佐渡郡羽茂町大石で「中川竹工所」を営む中川眞晴さん（大正10年生まれ）に出会い、聞き書きを試みた。

聞き書きのような記述的手法を用いた研究は、地理学において多くはない²⁾。内田（1999, pp. 34-35）は地理学におけるモノグラフの位置付けに関して、民俗学との比較で次のように述べている。

「自然科学の発想が重視され、法則定立を目的とする地理学では、個性記述的なモノグラフという成果は、非科学的で、非生産的な仕事とされがちである。地誌記述は総花的とされるだけでなく、住民の生活や数字でとらえられない地域の雰囲気など、主観的な要素が入りやすいのである。しかし、同じく地域を扱う場合でも、民俗学は住民の生活実感や価値観、想像力に関わる文化を記述し、考察する。」

民俗学において聞き書きは多く用いられてきたものの、手法自体を検討した論文はあまりみられない³⁾。筆者自身その有効性について真っ向から検討するという作業を未だ行なってはいないが、文献資料、物的資料、統計などから把握できない事柄をすくい取る可能性について、聞き書きという手法を評価したい。ある人間がある状況においてどう感じたか、どうしてそのように感じたのかを知ることは、その人の背景にある暮らしや社会を考えるヒントとなるであろう。

本稿ではある結論を導くまでには至らないが、中川眞晴さんへの聞き書きを紹介し、ひとつの手工芸品とその職人が歩いてきた道をたどってみる。

2. 調査地域と話者の概要

1) 羽茂町大石について

大石は佐渡島南西部に位置する羽茂町の、大石湾に面する人口300人弱の集落である（図1）。

羽茂町は農業（主な作物は柿や米）が盛んで産業の約40%を占めており、漁業の割合は0.2%と非常に小さい（ちなみに町全体の漁業就業者7人のうち5人は大石）。大石に限ってみても農業は主要産業であるが約31%と、町全体での割合よりは小さい。そのかわり大石では製造業が約24%（町全体での割合は約18%）を占める点が特徴的である（以上平成7年国政調査時）。かつて味噌工場が集中した大石には、現在もマルダイ味噌工場があるためであろう。

大石港には、18世紀後半天領の年貢米を積み出すため御蔵が建てられた。北前船が寄港した隣の小木港のように大きなものではなかったが、これ以降物流が盛んになり、明治に入ってから入港船舶数が伸びた。明治・大正・昭和と出入りした機帆船の主な貨物の中には、農産物・味噌及びその原料資材、薪炭、建築資材、日用雑貨等他、竹藁細工等も含まれていた。また、北海道や樺太へ味噌を輸送する為汽船も入港した（羽茂町史編さん委員会編、1998；尾留川、1964）。

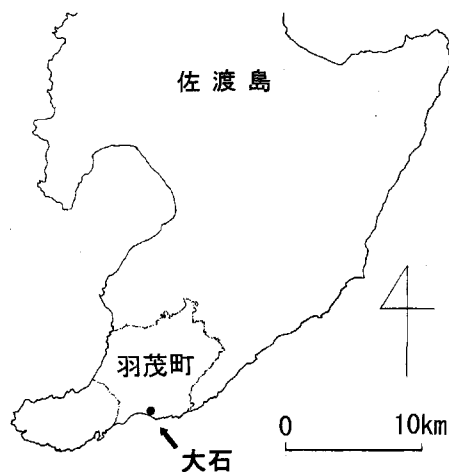


図1 羽茂町大石の位置

2) 佐渡の竹細工と中川眞晴さんについて

佐渡には竹が多く、小木を中心に赤泊に延びる海岸地帯を主として島内各地で竹細工が製作されていた(尾留川, 1964)。運賃が比較的少なくすむ竹細工は北海道への移出などには適した製品であったと言えるであろう。

小木では最盛期の正15年には箆を中心に112人もの竹細工職人がいたが(小木町史編纂委員会, 1977), 羽茂で専業としていたのは大石の中川辰平さんのみであり, 家庭用の箆, 籠, 農業用の田植籠, 漁業用の釣籠, 海老籠, はえ縄箆, 魚を入れる樽籠, 味噌屋で使う米上げ箆, 豆上げ箆, 豚の輸送に使う豚籠など, 注文に応じていろいろなものを作っていたとのことである。(羽茂町史編さん委員会編, 1998)。

そしてその息子が, 中川眞晴さんである。中川さんは子供の頃から親の仕事を見よう見まねで覚えたが, 先代からの技術をそのまま今日まで受け継いできた訳ではない。途中で樺太へ出稼ぎに行き, 中国大陸での軍隊生活を経て, 佐渡へ戻った。その後職人としての生活が始まり, 自身で試行錯誤を積み重ね, 竹細工から籐細工へ転向した経緯を持つ。それ以後も竹細工は昭和50年頃より作品として作り続けており, コンクールに出品するなどしている。詳細は次章の語りで紹介する。

3. 中川眞晴さんへの聞き書き⁴⁾

家業の竹細工: 別に仕事つってもな。軍隊から帰って来てから, 何もすることないもんだから, 結局親の。ま, 親がだいたい竹細工やとったもんだから。それを見よう見まねでやった, ということだ。生活のため。

それ以前は, あの, 小学校五年生んときから, 五年生六年から今のサハリン⁵⁾へ行ってます。四年終って, 要するに四月頃ですか。やっぱりあのう, うちが 乏だったもんだから, それで結局口減らしているかな。それがために樺太へ。兵隊に行くまでそこにおったの, 呉服屋に。だから結局は兵隊から帰って来ても, 呉服屋系統をやりやよかったんだけど, 呉服屋ちゅうことになるややっぱり相当資本が要りますもんで, それでまあ一手っ取り早いところがこれだ。で, この仕事を始めた。

そういうことで別に, うーん, 師匠についたとか人から教わるとか, そういうことは全然なかつ

た。自分で結局あの, 小さい頃からやっぱり親の仕事を見ておったのが, やっぱり, 初めてでもさ, その当手を思い出しながらやっぱりやって, どうにかこうにかできたもんだ。

一応そういうこと(父親が師匠)になるかね, うん。それだけのことなんです。だからまあ, あんたがたそういうふうにして(調査に)来られても, 別にこれといって何もお話しすることはないような気がするんですが, ただ聞かれたことに対しては, 自分の歩いてきた道だから, それだけのことはお答えできる。

親父の親もやっぱりやとったらしいんですよ。私で三代目になるかね。うん,(祖父の)代から。竹細工っていうものは, こちらやっぱし田舎で, まあ百姓, 農家がほとんどだったわけですね。それがために, その農家とか漁業とかそういう人たちの道具っていうかな, やっぱりあのいろいろ農家でも使うその, 年間に相当の数の竹製がやっぱり必要とされた。漁業もそうだし。そういうようなことで, 結構やっぱり商 になったんです。ええ。それで, まあ先祖もやとったんだろうと思うんです。

あれ(味噌樽を絞める杵)はまた違うんですよ。竹細工とはいえ, あれは輪竹と言いまして, 結局輪っぱを作る竹だから輪竹。あれは相当量の竹も必要で最盛期には佐渡だけの竹ではなんていうかな, 使う量が足りなかったんです。それであの, そっちの半島の能登半島ですか, あそこらからやっぱり輸入, 輸入っていうかな仕入れた。あれはものすごい, ま, やっぱり味噌の, 結局樽で当時は出荷した関係で相当出て, 業者もそうねえ, 羽茂だけでも七, 八軒あったんですね。うん。これは相当量ですわ, やっぱり。ま, 結局金額的にも大したものですよ, はい。

その輪竹, 桶のタガにする竹とはまた別に, こちらはもう言っているかな, 草を刈って入れる籠とか, それから田植えの時に使う苗籠とか, それから苗を運ぶ大きな籠とか, そういうものとか。それから後は, 秋になって稲刈りが終わって初を選別する初通しなんていう, そういうものとか, あるいはまた大小いろいろの箆, ま, これは家庭用になるけども。あるいはまた, もの…魚なんかを干すメカゴとかね。それから今度は海の方へ行ってはやっぱり釣り籠だとか, それから漁師が使うエビを生かす籠だとか, そう言ったようなもの

が相当な種類としてはあったでしょ。だからそういうものを作っておれば、結構やっぱり生活もできておったようです。

私らの場合はそれが、あの兼業でなくて。まあ生業ちゅうか、それが生活のあれ（手段）であっただけですわな。主力だったわけですよ。

樺太：兄弟は私の場合、そうですね、ええと、五人。おれは二目。

そうそう（兄弟のうち一人だけ樺太へ）。で、一年半位…二年位してからかな。私のすぐ下の弟も、まあ向こうが人手が要るということで、それでちょうど私も行っった関係で、どうだおまえ来てみんかということで弟もやっぱり。ええ。行って一緒にやっておりました。

向こうはよかったですよ。樺太はよかったですよ。ええ、そりゃもう。

どういうところ（がよかったか）って、結局あの、ここにおると…。こんな話してもあんたがたわかるかしら、食べ物も満足に食えんような状態だったもんだから。向こうへ行ったら食べ物はいいし、おらもう殿様みたい。やっぱり修行期間、修行中はつらいこともあったけど、それはまあ仕方がないとして。そういうつらさは行ってる者はまあほとんど。その時はちょっとやっぱり泣けたりしたこともあったけど、それよりも三度三度の食べ物です。

しかも私行ったところは、ものすごいその何と云うか、そこのおかみさんがおおらかな人で、やっぱり他の店なんかでは食い物も相当ケチケチしておっらしいんだけど、ものすごいその、何と云うかな、おおらかで。どう言ったらええか…、うん、「根性良し」ちゅうんだかな、気前のいい人で。食べ物なんかも本当に腹いっぱい。だからそれが一よかったんじゃないですか。うん。

（仕事は）呉服屋。呉服屋で、結局使用人が店の方だけで使用人が七、八人はおったかな、私のいたころは。あとお勝手の方でジュウバ二人ぐらい。

うん、まあ、丁稚奉公して。ええと、七年八年かな。もうあそこから、やたらに帰ってこれないもの。十三からですか。二十一まで。

（帰ってくるきっかけは）兵隊。それからずーっと兵隊に行っって、それで結局昭和二十…二十二年かな。昭和二十二年に帰ってきた。（兵隊では）

北支の方へ。北京、だいたい北京から保定⁹の周辺、そんなとこ。兵隊で五年位。（佐渡へ帰るまで通算）やっぱり十何年ね。

竹細工を始める：（二十六歳頃に佐渡へ戻り）それから竹細工を始めて。そうして、どうだろう、三、四年はやっぱりいろいろこっちでれるものを作っったんかな。三、四年ぐらい、たぶんそうだと思うんですよ、はっきりとした記憶はないんだけど。それから、あれどうかなあ、四、五年。三年？ 四、五年してからかな、帰ってきてから。四、五年してから、どういうそのなんていうかな、都会の方へ行くとれるものがあるらしい、ということで。それでうーん、というかその新潟の辺まで行って見たんですわ。見たら…、ああそうか、それ前に竹籠、竹のい物籠というのがあって、それを作ってみようと思ってね。

先代の竹細工とはまた全然違うって言ってええかな。うん。結局その竹の籠を作ってみようかと思ったのは、そこらにあるようない物籠みたいなもんですわ。それでまあ、ものすごい数がれると、いうことでやってみたんです。ところがやっぱりそのやっっていくうちにいろいろ、その竹をここをする面に（などと）生かすことがいっぱいあって。

で、それはあちこち、ま、いろいろそういうことを考える前に、早、隣の小木町あたりにやっぱり相当やっとなる人がおったわけですね。で、そういうとこへ行っってやっぱり技術を盗んだりなんかして。行って教えてくれ言うてもなかなか教えてくれん。だからやっぱり、竹の染色にせ何にせ、やっぱり行っって見ながらやっぱり技術を盗んで来るより他に道はなかったわけですわな。

若さの至りというのかな。ま、流れてる染め物の汁が流れとると、それを見たり。それから、薬屋へ行っって聞いたり。ま、薬屋、薬局ちゅうかな、そういうとこに昔はまあその染料を っったわけです。それこそ量りりていくらでも ってくれた。ほれで、あそこではどういうものを、とにかく竹を染めとる家の名前を言うて、あそこではどんなものを いうていくとか何とか、そんなこと聞いて。まあそういうようなことでどうにかこうにか、それこそ始めてから二、三年してから、やれるようになったのかな、うん。

そうそう（しばらくは試行錯誤で）、そらそう。

それとほら染めない、染めないで竹を青のまま、青というかまゝそのままを使うか、あるいはまたそれを油抜きして、そうして白にして使うか。で、その初めのうちはやっぱり白で使ったんだけど、やっぱり白だけではダメだということで、やっぱり染色せんならんということでそれを染めて使うようになったわけだな。染料があるんですわ。塩基性の染料が。塩基性の染料で、ま、いろいろな色をやっぱり、二つぐらい混ぜたりなんかして、染めとるんだ。

やっぱりあのう、まゝ、なんというかな、着物でも何でもそうでしょう、藍染めの着物だけではやっぱりダメで、柄物が必要になってくるのと同じ。染めていろいろ交互に編んでいくと、ま、いい柄も出来てくる。そういうことはやっぱりその呉服屋におった関係上、女の人の気持ちも多少はわかるし、ま、有利な点もあったわけですわね、うん。

(染めた方が) 割り方よかったですね。染めとか柄。それからやっぱりあの、まゝ、籠持つ者はだいたい女の人もんだから、女の人の気持ちなんかをつかむのには、非常に呉服屋におったときのことがよかったです。

それから、もちろん外交にも出んならん。それからしばらくしたけどもやっぱり外交にも出んならん。そうすると外交に出ても、人様と相對して話したときなんか、やっぱりこっちは呉服屋のときとにかく人間対人間の取引きだったもんだから、愛想ちゅうか愛嬌ちゅうか話術ちゅうか、そういうようなもんが— 大切なもんだったから。やっぱり外交に出てもそれが役立ったっていうことですね。それでどうにかこうにか、まゝ、やってきたようなわけですわ。うん。

それ(職人氣質で愛想がないということ)は全然なかったです。それがないだけにやっぱり困ることもあったし、ええこともあったような気がしますね。職人氣質なんちゅう気持ちは私にはさらさらないです。だから、どこの人が教わりにきても、いくらも教えて。そら、もちろん自分の手間はつぶれるけども。それでも、自分の会得したわかるだけのことは、教えてやって。今でもそうです、ええ。

籐細工への転向から現在：竹の籠作とったけども、それがやっぱりまゝ、だんだんだんだん、こ

の昭和の中頃か、になると交通の便も良くなり。(それ)から、人もものすごい仰山、東京あたりへ行ってみるとデパートあたりにも相当な人がおるし。それから、街歩くにも、ま、今でもひどいけども、その頃もやっぱりものすごい人だったんだ。

ところが竹で作った籠は、その人ごみの中を持って歩くとベッシャンコになる。ベッシャンコになると竹は折れる。そういうようなことで、もう竹の籠はダメだちゅうことに。うん。ていうことはまゝここに佐渡のこの田舎におって、おれはやっぱりそれをつくづく感じて、こりゃ何とかせんならんぞと思うた。

そこで、今言う越後ちゅうかその新潟の近辺のどこへ行ったら、籠が。これ(籐)で作った、今の籐で作った籠が出とったわけです。ところがこれの作り方がやっぱり難しいんだけど。その以前兵隊から帰ってきてまもなく、つり籠とか何とかそういうものを作とった関係で。作り方がだいたいつり籠と同じだったもん。「よしこれならいけるぞ、そんならこれやってやろう」ちゅうことで。まず佐渡では私が最初でしょう、籐を入れたのは。

さ、ところが、材料探しにまた困る。それでいろいろ人に聞いたり、本見たりなんかして、結局この材料は大阪にあるちゅうことがわかって。あとからわかることや、東京にもありゃ名古屋にもあちこちにあるんだけど。ま、大阪にあるちゅうのを聞いたもんだから、それで大阪へ飛んで行って。

それより前に名古屋の間屋へ行って、ほれで、「実は竹の籠はこういうふうなあれでつぶれると

れんと、それではまずいのでおれは籐の籠を始めたいのだ」ということで行ったら、「うん、それはいい」と。いいから「いくらでもおみやあ(おまえ)のところで作ったら作っただけのものは、おれのところでうからやってみい」ちゅうことで。それから大阪へ行って材料を仕入れてきて、ま、始めたのがこの製の始まりです。ええ。

そら、編んでいくうちには(竹細工とは)微妙に違うところもあるさ。あるけどもやっぱり「ヘビの道はジャの道」「ジャの道はヘビ」だかしらんけども、なんともないわさ。

今ですか? そうですね、今は、今はそれでも二十種類ぐらい作とるかな。

この 景気出くわしたら、まずだめだな。こういう籠でもどうだ、去年も駄目だった。おとしぐらいまでは、そうねえ、どうだろう、一月に二百ぐらいは作った。それやっぱり脱衣籠は旅館、ホテル、それからゴルフ場、そういうところにまあ、ものすごい量が出たんですわ。

県内なんてもんじゃ(ない)、日本全国。それも、それで結局我々みたいなこういう小さいところは駄目んだらう。やっぱり、今このカタログのYラタン⁷ ちゅうもんが、これが言うてみりゃ、世界的なラタンメーカー。で、ここ見つけて、それでここへお願いして、ここへ納めることになるとる訳なんですわ。

今はこんなもんでも、向こうから、中国とか何とかあっちから来るものだと、このぐらいのでも、そうだなあ、三千、二千円か三千円で えるはずなんです。ところがここで るのは一つ一万、一万ぐらいする。それでもやっぱり れる。だからやっぱりあの、何ていうかな、やっぱり高級 志向っていうかな。やっぱり安いものは駄目だっていうことだ。

Yラタンは取引きお願いしてからどうだろう、ええと十二、三年になるかな。平成に入る前かな。ここ(Yラタン)へ入るちょうど頃かな、だんだんやっぱりあっちの方から安いのが入ってくるもんだから、ああいうところ(以前納めていた名古屋の間屋)ではやっぱり れんようになった。それで、ここ(Yラタン)へ「こうこうこうで一つこういう物を作ってみたい」ちゅうたら、やっぱり何ちゅうかな、製 がおれんとこのがよかつたんだらうと思うんだ、いっぺんでOKしてくれて。うん、それから、今度は向こうの言うとおりのものを作っております。

「遊び」の竹細工：藤を始めてから竹細工は…。でもやっぱりそれでも、竹やってみたいなあちゅう気持ちは捨て切れないもんだから、ま、あの今度竹細工が遊びになったなんていうかな、このとにかくこれだけの竹やぶがあるし、遊びの方にちょっと、ふらふらーっと。

こういうふうな遊びをやるようになって。それでどうでしょう、二十年、二十年ぐらいやつとったかなあ。

やっぱりこれ作っても れないしき。 れないし、 らないし。まあ、やっぱり、いまおったあ

の孫だとか倅に一応やっぱり聞いてみて、「残しておきてやあ(おきたい)」ちゅうもんだから。

らないつうこともないんだけど、やっぱりってしまうともう作れない。

まあ、賞も。賞って言ってもそうだなあ、日展に出したいと思って、日展にそれでも二回、三回ぐらい出したんだけど。ちょこっとところどころで…。あと現代工芸は出し取るんだ。だから中央展で、要するに上野で入ったのは一つしかなかったかな、一回しかなかった、現代工芸で。うん。それとまあ、県は、県の方はずっと。こういうこと始めると今度はやっぱり毎年その時期になると、ムラムラーッとして。

今はこの目を悪うしたら、全然こんなことできんようになってき。目でも悪うなけりゃ、まだ腰が悪いだけなもんで、どうちゅうことはにやあ(ない)んだけど。はや今こうやって見ても、そこのところがどんな風になってるかかわからん。

うん(今も毎日仕事をしている)。毎日、ま、結局もう何も望みもなけりゃ何もにやあ(ない)もんだから、仕事しとるのが一 やっぱり身体のためにもええんだらうし。

4. おわりに

以上中川さんの語りを紹介してきた。もっとも印象的だったのは、樺太での生活についての話である。前章では質問を省略したが、筆者は樺太ではさぞ厳しい生活だったのだらうと思い、また厳しかったという返事を予想しながら、「向こうではどんな感じの生活だったんですか」と尋ねた。予想に反して、「向こうはよかったですよ。樺太はよかったですよ。ええ、そりゃもう。」との答えであった。

彼自身が説明しているように、当時の羽茂が「食べ物も満身に食えんような状態だった」ということが何より大きな理由であろう。それに加えて中川さんの前向きな性質によるところもあったのではないかと感じた。

佐渡に戻ってきてからの中川さんは、試行錯誤しながら竹細工に励んだが、それについても呉服屋時代の経験が生かせたとプラス志向で振り返っている。そして籐細工への転向は、生活様式の変化を感じ取って選択したものだだった。自身で売り込みに行ったところにも、商売の経験が生かされている。

そして「竹やってみたいなあちゅう気持ちは捨て切れられないもんだから」と「遊び」という形で竹細工も続けている。今なお「中川竹工所」の看板を掲げていることについて、質問しそびれてしまったが、中川さんの竹への思いが表れているのではなかろうか。

現在、中川さんには息子さんとその娘さんという後継者がおり、作業場では三代一緒に仕事をしている。手工芸品がおかれる厳しい状況のなかで、これは大変なことではないかと思う。それぞれの製品には、職人の個性が表れるだろうし、社会や生活様式の変化と関わって、中川さんがこれまで作り出してきた製品とはまた違ったものになっていくだろうが、その動向に注目していきたい。

最後に聞き取りに関する懸念について付け加えておく。筆者の力不足のために「ここでこんな質問をしていたら、さらに深いお話が伺えたのでは」といった感想を、読者に与えてしまったかもしれない。これは、筆者自身の今後の課題である。

謝辞

急なお願いにもかかわらず、貴重な時間を割いて快くお話しして下さった中川真晴さん、及びご家族の方々に厚くお礼を申し上げます。また調査時には、中川竹工所以外の多くの方々にもお世話になりました。ありがとうございました。

注

- 1) 終わってしまった手仕事の時代を振り返るという立場で職人への聞き書きを集めた最近の作品に、塩野 (2001) がある。
- 2) ただし西 (1998)、湯澤 (2001) など、ライフヒストリーを活用した地理学の研究もみられるようにはなっている。
- 3) ただし、小池 (1989) は聞き書きという手法と民俗学の関係について詳細に検討している。
- 4) この聞き書きは録音したものを文字に起こし、筆者の質問等を略し、文脈を整理し再構成したものであるが、話者の語り口を出来るだけ残すよう心掛けた。わかりにくい部分は () を用いて筆者が補足した。
- 5) 佐渡と北海道との関係は近世以降重要であり (外内, 1985)、江戸時代には蝦夷地への出稼ぎ

を指す松前稼ぎという言葉が存在したほどであった。大正三年の羽茂村の戸数も「北海道へ出稼者ある為戸数に比して人口が少い」という記載 (羽茂村村誌編纂委員会, 1956) が見られる。その延長で樺太まで出稼ぎに行った人たちが存在したと推測されるが、その実態について記載された資料を筆者は見つけられていない。

- 6) 北京から西南に約140 km離れた町の名前。
- 7) ラタンメーカーの名前だが実名をふせる。

文献

- 内田忠賢 (1999) : 都市の新しい祭りと民俗学—高知「よさこい祭り」を手掛かりに一. 日本民俗学, 220, 33-42.
- 小木町史編纂委員会編 (1977) : 『佐渡小木町史・史料集・下巻』新潟県佐渡郡小木町, 490p.
- 尾留川正平 (1964) : 佐渡の産業誌. 九学会連合佐渡調査委員会編『佐渡 自然・文化・社会』平凡社, 332-369. (1989年復刊)
- 小池淳一 (1989) : 言語・伝承・歴史: 日本民俗学における個人認識. 族, No.10, 20-31.
(<http://www.histanth.tsukuba.ac.jp/minzoku/pub/10/y10koike.html>)
- 塩野米松 (2001) : 『失われた手仕事の思想』草思社, 255p.
- 外内千恵子 (1985) : 松前稼ぎ. 月刊歴史手帖, 13-7, 47-54.
- 西律子 (1998) : 単身高齢者を取り巻く居住空間と居住意識—文京区における集合住宅居住者の事例—. 経済地理学年報, 44-3, 44-59.
- 羽茂町史編さん委員会編 (1998) : 『羽茂町誌・第4巻 (通史編)』羽茂町, 899p.
- 羽茂村村誌編纂委員会編輯 (1956) : 『羽茂村誌』羽茂村村誌編纂委員会, 661p.
- 古河静江 (1964) : 民具. 九学会連合佐渡調査委員会編『佐渡 自然・文化・社会』平凡社, 225-239. (1989年復刊)
- 湯澤規子 (2001) : 結城紬生産地域における家族内分業の役割—織り手のライフヒストリーからの考察—. 地理学評論, 74A, 239-263.

なかむら・みお

お茶の水女子大学大学院人間文化研究科
発達社会科学専攻・地理環境学コース